

マイスター 木育達人入門



木育とは、

子どもをはじめとするすべての人が

『木とふれあい、木に学び、木と生きる』取り組みです。

それは、子どもころから木を身近に使っていくことを通じて、

人と、木や森との関わりを主体的に考えられる

豊かな心を育むことです。

はじめに（改訂にあたって）

木育（もくいく）は、北海道で生まれた新しい言葉で、平成16年（2004年）に北海道と道民による「木育推進プロジェクトチーム」がスタートする際、「木育」という言葉が作られました。

プロジェクトチームでの話し合いの中から、上記のとおり「木育の理念」がまとめられ、北海道はこの理念を踏まえながら、木育の考え方や具体的な活動が息の長い道民運動として広がるよう努めてきました。

また、平成22年（2010年）度から取り組んでいる「木育マイスター」育成研修により、木育を普及させる専門家として平成28年（2016年）度までに200名の「木育マイスター」が認定されました。

本書は、木育マイスターを目指す方から、木育に関心があるけれど何から始めていいかわからないという初心者の方まで、木育に関わりたい幅広い層の皆さんに参考にしてもらえるよう、平成21年（2009年）に設置された「木育プログラム等検討委員会」の中で、委員の方々と協働で編集・作成されました。

作成から7年が経過し、木育を取り巻く情勢が変わってきたことから、木育に関する新しい情報や最新の木育事例などを盛り込む形で、この度、本書の改訂を行いました。

多くの道民やこれまで認定されてきた「木育マイスター」の皆さんの今後の木育活動の際に参考としていただき、北海道発の「木育」が道内はもとより全国各地へ広がっていくことを願っております。

平成29年12月
北海道水産林務部森林環境局森林活用課

目次

第1章	木育の理念	1
第2章	木とふれあい、木に学ぶ	15
第3章	木と生きる～暮らしと産業～	25
第4章	木と生きる～人の成長と木の関係～	35
第5章	木育はつながりのキーワード～プログラムの伝え方～	43
第6章	木育はつながりのキーワード～プログラムの作り方～	49
第7章	アクティビティの紹介	53
第8章	木育プログラムの紹介	61
参考文献・資料		71

このテキストについて

- 第1章「木育の理念」では、木育が生まれた背景やその概念を学び、各々の活動指針となる「私の木育宣言」へ向けて目標を見つけましょう。
- 第2章「木とふれあい、木に学ぶ」では、森林や森づくりの仕事、樹木など、木育の達人として活動を実践する際に必要となる基礎的な知識を学びましょう。
- 第3章「木と生きる～暮らしと産業～」では、日常の生活の中にある木を再認識するとともに、現在の林業・木材産業を取り巻く情勢などについて学び、私たちの暮らしと木との関わりについて考えましょう。
- 第4章「木と生きる～人の成長と木の関係～」では、人の成長の過程と木との関連や「感じること」の意義・重要性、木がもたらす「癒し効果」などについて学びましょう。
- 第5章「木育はつながりのキーワード～プログラムの伝え方～」では、木育プログラムを実践する際に必要となる「参加者への伝え方の技術」や注意すべき点などについて学びましょう。
- 第6章「木育はつながりのキーワード～プログラムの作り方～」では、実際の木育プログラムの考え方や作り方について学びましょう。
- 第7章「アクティビティの紹介」では、木育へとつなげるためのアクティビティの事例を紹介しています。
- 第8章「プログラムの紹介」では、道内で実際に行われたことのある木育活動の事例を紹介しています。

第1章から第6章までは、木育マイスターの認定を目指す方や、木育活動の指導やコーディネートに積極的に携わっていかうとされている方を意識して作成しています。ただし、通して読んでいただければ、北海道の木育に関する基本的な知識を理解できるようになっていますので、木育の初心者の方にも役立つことでしょう。特に、第1章は必ず読んでください。

第7章と第8章は、「木育には関心があり、何かをやってみたいけれども、実際に何をしていいのかわからない」、そんな方のためにあります。例えば、学校の授業で木育活動を実施したい時などは、読んでいただければ、そのヒントになるでしょう。

なお、巻末に参考文献を紹介しましたので、もっと深く知りたい方は、ぜひそちらをご覧ください。

◆木育マイスター、木育の達人、プロデューサーなど、呼び方はいろいろありますが…

本書のタイトルは、『木育達人入門』です。「達人」には、「マイスター」と振り仮名がついています。また、本文の中では、木育の指導者、プロデューサー、コーディネーター、担当者、協力者など、人の役割を表す表現がいくつか出てきます。

読者の皆さんが名称の違いについて混乱されるかもしれませんので整理してみましょう。

まず、本書の発行の目的について改めて確認しておきます。

1) 研修テキストとして

「はじめに」に書かれているとおり、平成 22 年度から北海道では木育マイスター制度が始まり、マイスターの育成が行われます。その育成研修時に使うテキストとして用いられることを前提に、章立ても考えられました。研修カリキュラムに沿った流れの内容になっています。

2) 学校やNPO法人などの団体へ配布して木育活動の参考にしてもらう

北海道では木育を普及させるため、平成 22 年度に道内の学校などへ本書を配布しました。木育マイスターのように専門的な活動をする方だけでなく、学校の教員や地域活動リーダーの方などにも木育活動に取り組んでもらいたいとの考えからです。認定されたマイスター以外にも、多くの方々に木育の達人になってもらいたいという願いを込めています。

このような背景を踏まえた上で、タイトルは『木育達人(マイスター)入門』となりました。マイスターと達人について、イメージを記すと次のようになります。

〔木育マイスター〕

北海道が認定する、木育を普及させる専門家。ある分野(森のこと、木工についてなど)の専門的知識を持ち、企画力やコーディネート力のある方。自分の得意分野でない活動をする際には、その分野に強い方の協力を得てプログラムを組み立てるようにします。学校や団体から依頼があれば、木育プログラムの企画立案や運営実施のアドバイスやプロデュースをします。自らアクティビティを行う場合もあります。

〔木育の達人〕

木育の考え方に共感し理解を深めた上で、木育活動の指導やコーディネートを行う方。

「達人」にマイスターの振り仮名が付けられていますが、正確には達人=マイスターではありません。木育マイスターは平成 28 年度までに 200 名が認定されていますが、特にマイスターにならなくても、木育の活動に積極的に取り組む皆さんは、木育の達人だと考えていいのです。

少しまわりくどい話になりましたが、理解してもらえましたか。プロデューサーなどの役割もまとめておきましょう。

1) プロデューサー、コーディネーター

この二つはほぼ同じ意味で使っています。木育のプログラムを組み立てる人です。アクティビティ実施時に自ら指導する場合もあります。

2) 指導者

これも、上記1のプロデューサーなどと重なりますが、アクティビティ実施時の指導をする割合が少し高いかなというイメージです。

3) 協力者、担当者

プロデューサーなどの依頼を受けて、アクティビティ実施時に協力してもらう人。その道の専門知識を持つ人。(例)木工房の指導員、ある特定エリアのネイチャーガイドなど

このように、名称はいろいろありますが、きっちりした線引きがあるわけではありません。対象者、地域性、目的などによって、臨機応変の役割対応をしながら、木育活動に取り組んでいくことが大切でしょう。



第1章 木育の理念

ここでは、木育が生まれた背景と現在どのように位置付けられているのかの概要を理解しましょう。また、それぞれの「木育宣言」に向けて、自分の得意分野と活動テーマについても考えてみましょう。



1 木育が生まれた背景と現在の位置付け

(1) もっと暮らしにつなげたい 北海道の森林と木材資源

私たちのまわりでは一枚の紙から家具や建物に至るまで、木から生まれたものがたくさん使われています。でも、材料となった木やその木が生きてきた森を想像できる人はどれだけいるのでしょうか？

近年わが国では、利便性や経済効率の追求などによる生活環境と自然環境の変化によって、人と人、人と自然、モノと自然とのつながりが希薄となり、社会や自然に様々な「ほころび」が生じています。

森林が地球温暖化防止などに果たす公益的機能に対する関心が高まる一方、個人レベルでは「木を伐ってはいけない」、「木を使うことは森林破壊につながる」といった意識も根強く残っています。

北海道の森林は日本の森林面積のおよそ4分の1を占め、京都議定書での森林吸収目標の達成や生物多様性の保全など、21世紀が抱える地球規模の環境問題に対してその役割に大きな期待が寄せられています。道産材供給率^{*}は、平成12年度の34%を底に、平成27年度には57%と5割を超える水準にまで回復していますが、まだ暮らしの中に木の文化として定着しているとは言えません。

森林には経済財、環境財、文化財としての3つの価値があります。これらの価値はどれも欠けるところなく、総合的であるほどそれぞれの価値も高まります。森林から生産される木材等の収益が森林の整備や保全に使われることは、森林づくりを進める上で大切なことです。そして、木材を人と環境にやさしい方法で利用することは、資源の循環利用につながっていきます。

森林の多面的機能を発揮するためには、針葉樹と広葉樹が入り交じった北海道にふさわしい森林と、そこで生活を楽しみながら木とともに暮らす人々の文化が育まなければなりません。それには、先人やアイヌ民族が自然から学びとった様々な知恵を活かすことが必要でしょう。このような背景から、北海道の地に木育が生まれました。

※道産材供給率とは、北海道内に供給される木材の量に占める道産材の割合です。

(2) 木育の位置付け ～北海道の木育と国の木育～

木育の考え方については、大きな方向性は同じでも、立場や地域事情などにより優先順位や位置付けが多少異なる場合があります。北海道と国それぞれがまとめた木育の位置付けと現在の流れを記しておきます。(※木育年表 P9～参照)

●北海道の木育

平成16年度に北海道と道民による「木育推進プロジェクトチーム」が検討の結果、木育の理念(冒頭ページの囲み参照)がまとめられました。以来、北海道の木育は、森林や木材に関わる方々はもとより、一般道民、NPO、企業など、さまざまな方々との協働による、息の長い道民運動として進められています。

これを踏まえ、平成20年3月改定の北海道森林づくり基本計画からは「木育の推進」が新たな章として加えられました。

木育は、人と森林や木材の『つながり』を重視し、豊かな人づくりと社会づくりを目指す新たな概念です。百年先を見据えた森林づくりを道民の総意により推進するため、全国に先駆けて平成14年に制定された「北海道森林づくり条例」においても、平成28年3月の改正では、新たに「第18条 木育の推進」が追加されました。平成29年度より10年間の北海道森林づくり基本計画では、木育マイスターとの連携や、子育て世代とその子どもに対する木育活動に重点が置かれています。

●国の木育

平成18年9月に閣議決定された森林・林業基本計画において、木育は「市民や児童の木材に対する親しみや木の文化への理解を深めるため、多様な関係者が連携・協力しながら、材料としての木材の良さやその利用の意義を学ぶ、木材利用に関する教育活動」と位置付けられています。

林野庁では「木づかい運動」の一環として、自治体、企業、NPOなど様々な分野にわたり、子どもから大人まで幅広い対象に向けた多様な活動として木育の取組が広がっています。

2 木育とは？－木育の目的と領域－

(1) 木育のめざすもの

●五感とひびきあう感性

木と五感でふれあい、手でつくり、考える経験を通して、人と自然に対する「思いやり」と「やさしさ」を育みます。

●共感できる心

身近な人と木で遊び、木に学び、モノをつくる体験を通じて楽しさや喜びを共感し、地域や社会、産業への関心につなげます。

●地域の個性を生かした木の文化

地域の森や木の良さを見直し、適材適所に木を使ってきた先人の知恵と技に学び、個性豊かな暮らしや文化を育みます。

●人と自然が共存できる社会

循環利用が可能な資源である木の可能性や、森や木に携わる仕事の素晴らしさを伝え、持続可能な未来へ向けた社会をめざします。

◆手のなかの森

ふと手にした木のタマゴ、木目も色も重さも手触りも、みんな違っている。

この木たちは、どこで、どんな時間を過ごして育ったのだろうか？

それぞれの木が生きた場所と時間はさまざまだけど、手にしたタマゴから、故郷の森に出会うことができる。



(2) 3つのプロセスに分けた木育の取組

木とふれあう

気軽に木にふれ、木に包まれることで、木の良さを感じるプロセスです。

木と積極的に関わって「五感と響きあう感性」をバランスよく育むことが、人の心を健やかに発達させていく大きな要素だと思います。

●木の道具を使う

数十年前までは、身のまわりにある道具は木で作られたものが主流でした。それが、石油化学製品が大量生産されるようになり、どんどん木の道具が消えていきました。例えば味噌汁は漆塗りの木のお椀で、子どものおもちゃは木製のもので等々、ちょっとしたものから木の道具を使ってみると、手触りや口あたりの良さなどを感じるでしょう。

●生活空間に木を増やす

私たちの社会や生活スタイルが大きく変化している中で、子どもたちが健やかに育つ環境づくりが求められています。特に、人間形成の基礎が培われる乳幼児期には、豊かな感性と心を養い、創造力を高める場が必要だと感じます。子どもたちの身近に、やさしくて温もりのある木に囲まれた空間を作ることが大切です。

木と緑があふれる幼稚園や保育園。地元産材を多用して建てた木造校舎。気軽にかけられる大きな木製遊具のある遊び場。こんな場所があれば、子どもたちは日頃から木と親しんで生活できるでしょう。

●木や森と積極的に関わる

木の椅子に座って本を読む。木の幹に触ってみる。森の中を毎日散策する。こんなちょっとした行動も、木や森と関わったこととなります。自分のできる範囲のことから始めていけば、いつの間にか深い付き合いになっているかもしれません。

木に学ぶ

木や森林について関心を深め、知識や技を身につけるプロセスです。

木は何万年も前から更新を繰り返して生きてきました。人間も大昔から木と身近に接し、木から学び、木の恩恵を受けながら現在に至っています。現代の生活においても、人は木から学ぶべきことが数多くあります。

●遊びや日常的な関わりの中から、森や木と自分とのつながりに気付く

子どもにとって、学びの機会は遊びや日常生活の中にも存在しています。それとは意識せずに、森の中で木や自然環境とふれあい、生活の中で木のモノを使うことによって、森や木と環境をきちんと考える豊かな心が育っていきます。知らず知らずのうちに、森や木とのつながりが作られていくのです。

そんな中から、木や森と自分との関わりについても気付くことになるでしょう。

●学校や地域のさまざまな学びの中から、モノを創造する知恵や力を培う

モノづくりは、素材との対話です。

木と向き合い、自らの手で加工する経験を通して、木の性質を知り、木を活かす知恵を獲得していくことが大切です。木との対話を通して、自分自身と向き合いながら感性を磨いていくことで、あらゆる場が学びの機会となります。

また、適材適所に木を使ってきた先人の知恵と技を理解することは、木の文化の継承にもつながります。

◆木は二度生きる

植物としての木の寿命は、長いもので2千年以上。私たち人間の何倍も、何十倍も生きるのです。

こうして森で生きてきた木が伐られると、今度は木材としてその木が生きてきた年月と同じくらいの時間を過ごすことができます。

「木は最初、樹木として森のなかで生き、二度目は、木材として人とともに生きるのです」

木と生きる

家庭や地域、社会で木育が実施・継続されるようにしていくためのプロセスです。

人間と木とは、ギブアンドテイクの関係で現在まで共に生きてきました。人間のわがままだけが許されるはずがありません。人と木が共存しながら、社会を築いていくことが重要です。

そのためには、木や森の正しい姿を理解し知識を得ることや、実際に木にふれ体験的に森を感じるが必要になってくるでしょう。私たちの生活が木に寄り添った、木とともに生きるものにするため、木育を息の長い道民運動として推進していくことが大切です。

●木育スタイルづくり

地域に根ざした木育ライフスタイルの提案です。例えば、木を使った住宅設計コンテスト、優れた木の家具やおもちゃを普及させる木育デザインアワード、ペレットストーブの利用推進など。豊かな森林と木材に恵まれた北海道だからこそ、地域の木材利用ネットワークとして「地材地消」を進めることができるでしょう。

●木育活動のネットワークづくり

木育に関連する地域や企業、ボランティア団体等の相互の情報や意見の交換など、活動の輪を広げるネットワークづくりの取り組みです。メディアによる情報発信、木育絵本、テレビ番組などの企画づくりを通して、積極的に企業やNPO、一般市民を木育へつなげることが可能でしょう。

●木育のまちづくり

地域コミュニティのふれあいの場として、木育拠点を育成することです。例えば、現代版寺子屋「トンカチ工房」、公園などの「木製遊具製作所」、木と森の産業や生活資料を保存する「木育蔵」等。また、地域モデルとして「木育のまち選定」もあるでしょう。

(3) 木育は「つながり」のキーワード

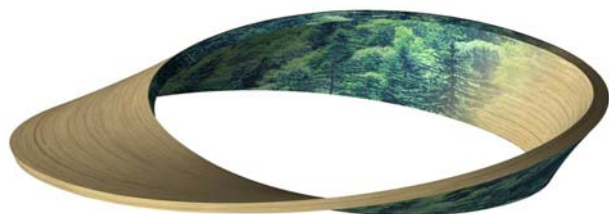
家族に囲まれ、地域の中で助け合い、身近な自然材料で生活用具を作る暮らしが当たり前だった時代。日常生活そのものの中に、感性や社会性を育む多様な機会がありました。今は家庭や学校をはじめ、社会の様々な場で「ふれあい」の機会が減り、お互いの「つながり」を感じられなくなっている現状があります。

●森林と木材は「メビウスの輪」のように表裏一帯の関係

森に生きる樹木と、日常に根ざす木材。

もともと一つの木でありながら、人の営みや見方がどちらかに偏ってしまうと、その「つながり」が感じられなくなります。川上にある森林と川下に位置する木材。これらは、「メビウスの輪」のように表裏一帯の関係なのです。いわば、大きなファミリーみたいなものです。

木や森という大きなファミリーとの関わりを通して、私たち人間も自然の一部であり、多くの生命と共存しながら生きていることを実感する。これが木育の取り組みです。



美しいメビウスの輪

●森林環境教育と木育

野外や自然の中での活動を主としている森林環境教育は、木育という言葉が生まれる前から活動が行われてきました。木育と重なる部分も多いのですが、森の中だけではなく日常の暮らしの中での木育と連携することにより、「どこでも、だれでも、いつでも」その機会に恵まれると言えるでしょう。

森の中で自然と接しながら学んだ知識は、より良い地球環境を生み出す意欲につながります。そして、木育で育まれる豊かな心は、自然との共生につながります。

森林環境教育は、平成 14 年度の「森林・林業白書」ではじめて明文化され、『森林の中での様々な体験活動等を通じて人々の生活や環境と森林との関係について学び、森林のもつ多面的機能や森林整備と木材利用の必要性等に対する理解と関心を深める。』と示されています。

●食育と木育

食育は、一人一人が生命と身体に直接かかわる「食の大切さ」を学ぶことで、健やかな身心を養っていきます。木育は、人が木と関わりながら様々な人たちと楽しさやうれしさを共感することで、「思いやり」と「優しさ」の心を育んでいきます。どちらも、自然からの恵みを感じて受け取る基本姿勢は同じです。

平成 17 年制定の食育基本法で、食育の目的は『国民が生涯にわたって健全な心身を培い、豊かな人間性をはぐくむため』と記されています。



●木遊びで「つながる」人の輪

遊びは子どもの人格形成にとって欠かすことのできない大切な行為であり、そこで生まれる「楽しさ、うれしさ」は生きる活力となっていきます。子どもたちが「木遊び」をすることで、人と人のつながりを深めていく可能性を秘めています。

例えば、子ども同士が木のおもちゃ遊びを通して友だちになる。親同士が顔見知りになって、おしゃべりをするようになる。ネットワークが広がって、子どもから高齢者まで参加してみんなで森へピクニックに出かける・・・。

「木が好きになる、人が好きになる、社会が好きになる、森が好きになる！」の繰り返しで、木と人、人と人、人と森のつながりが深まります。

●木で地域の個性をつくる

北海道大学では、構内のハルニレを学名の「エルム」と呼んで、大学のシンボルにしています。また、約100年前に植えられたポプラ並木は、観光名所として絵画や写真の題材となってきました。

平成16年の台風被害で約半数のポプラが倒壊した時、ポプラ並木再生のために多くの人々がボランティアで関わり、その活動は樹木から人々の記憶への大きな橋渡しとなりました。このように「地域の木」や「家族の木」「私の木」を持つことは、地域の個性を理解し、地域への愛情を育むことにつながります。

3 あれも木育、これも木育

(1) 様々な木育活動

北海道や全国の木育事例を参考にして、多様な木育活動を学びましょう。

第8章の木育プログラムや巻末で紹介した文献を参考にしてください。

(例)

- ・君の椅子プロジェクト（旭川大学大学院、北海道東川町、剣淵町）
- ・木育キッズクラブ（NPO法人ねおす）
- ・木と森から始まるコミュニティづくり（NPO法人モモンガくらぶ）
- ・森の“聞き書き甲子園”
- ・地元産材で作られた給食食器（北海道置戸町）
- ・森林ボランティア活動「森の学校」や、間伐材割り箸の製造と大学生協食堂での利用（NPO法人樹恩ネットワーク）
- ・札幌大谷第二幼稚園の森遊びと木を使った園舎
- ・木育フェスタ（道南）、（道北）、（道東）
- ・木育ひろば（各所）
- ・木育フェア in アリオ札幌
- ・北海道森づくりフェスタ
- ・お魚殖やす植樹運動

北海道水産林務部森林環境局森林活用課編集の冊子「木育事例集4, 5, 6」には詳しい内容が紹介されています。



北海道大学ポプラ並木再生支援記念品



森のようちえん（NPO法人ねおす主催）

◆木育ファミリー

木育ファミリーは木育推進プロジェクトのメンバーが中心となり平成 17 (2005) 年 4 月に発足した民間の組織です。各分野の方々と協力して、木育をすすめる活動をおこなっています。

木育発祥の地「北海道の木育」の大きな特徴は、木育推進プロジェクトから現在にいたるまで、行政と民間が木育を協働ですすめてきたことです。

「木育リビング」「木育全国ミーティング」「木育カフェ」等の主催事業に加え、「木育マイスター育成研修」「むかわ町穂別木育活動拠点づくり事業」の協力をしてきました。むかわ木育の学校からスタートしたグリーンウッドワークの普及活動、木育ファミリーホームページ、北海道の木育メルマガ「木育ファミリー便り」連載などの広報活動を行っています。

平成 26 (2014) 年には木育 10 周年の記念事業として、「木育絵馬プロジェクト」と「木育の 10 年をみつめて-木育 next10」を北海道との協働で開催しました。

シンボルマークには、木育のタマゴから芽が出て育つようにとの思いがこめられています。



Mokuiku Family

◆コミもり

森づくりで人のつながりを生み出す取り組み「コミもり」は、平成 19 (2007) 年に苫小牧市で開催された全国植樹祭跡地を利用して育まれてきた地域コミュニティから生まれました。

平成 21 (2009) 年より、苫東・和みの森運営協議会(いぶり自然学校内)の運営する「苫東・和みの森」では、だれもが気軽にやって来て親しめる、森のコミュニティセンターとなることをめざして、「月に一度は森づくり」をはじめとする各種の活動を実施しています。

コミもりには現在 6 カ所(道内 5 カ所、釜石市)のサイトがあり、各フィールドを活かした四季折々のプログラムを展開しています。

◆北のグリーンウッドワーク

グリーンウッドワークは、地域の森から伐り出された生の木を、人力の道具を使って割ったり削ったりして小物や家具をつくる木工です。生木(グリーンウッド)を材料にして、電動工具などを使わない環境に優しい加工法で、暮らしの道具を作ります。

この数十年グリーンウッドワークはイギリスを中心に、環境に優しいライフスタイルや余暇活動として広まってきました。これは日本でも昔から木地師やアイヌの人達が続けてきた、モノづくりの原点です。身近な庭木や森の手入れで出る小径木や間伐材などを材料にして、人の手で加工するグリーンウッドワークは、一般の人や子どもたちが、木の良さ、ものづくりの楽しさを実感できる「森と人をつなげる木育」です。



◆「希望」を「きぼう」でプロジェクト

北海道では、企業や団体にご協力をいただき、各地の木育イベントで木育マイスターとの連携のもと東日本大震災の被災地等へ応援メッセージを添えた「きぼう(木棒)」を贈る取組を行っています。

平成 26 年度より、道民の方々に作成いただいた「きぼうのプール(約 4000 本入)」を、毎年 12 月に東北の 2 カ所に贈呈しています。



(2) 私はこんな木育をやりたい！

これまであなたが取り組んできた木育を見直し、それぞれの木育の達人（マイスター）像をイメージしてみましょう。

あなたの得意な活動のフィールドは、森林などの野外ですか？ それとも屋内ですか？ また、技術や知識で優れている分野や人間的な魅力はどんなところでしょう？

そして、今の自分に足りないのは何かを考えてください。自分自身を知り個性を生かすことで、同じ木育のアクティビティやプログラムでも様々に変化します。木育に決まったスタイルはありません。地域や対象者に合わせてフレキシブルに変化できるのが木育です。

これからの木育活動のテーマを確認するためにも「私の木育宣言」を書いてみましょう。

参考に、二例を紹介します。

私の木育宣言

(北海道立林業試験場 佐藤孝夫さん)

「木育」に関して提案が2つ。

ひとつめは、子供たちとサクラのタネを播こう！一緒にタネをきれいに洗い、土に播き、苗木を育てる。苗木が大きくなったら、自分たちで植えよう。このことは、大人になってもきっと忘れないよ。そして桜が大きくなったらその下で花見をしよう。

ふたつめは、各地の乾燥地帯の緑化の手伝いをしよう！地球はいわゆるひとつの運命共同体。どこが良くて、どこかが悪ければダメ。外国へ植樹に行けば、きっと新たな日本や北海道、新たな自分が見えてくるよ。

木とみどりの仕事に関わってちょうど30年。多くのタネを播き、さし木を行い、組織培養でも木をふやしてきた。その間、ミャンマー、中国、モンゴルでも木をふやしたり、木を植えるという機会にめぐまれた。これからも自然から教わりながら、ずっとこんなすばらしい仕事に携わっていければと願っている。これが「私の木育宣言！」

[木育宣言を書くためのヒント]

- ・ 森、木、自然環境などで、興味のあることや気になっていることは？
- ・ 木育に対して自分にできることは？
- ・ 自分の強みは？
- ・ 得意なフィールドは？
- ・ 木育への思いは？
- ・ 木育に興味を持ったきっかけは？
- ・ 木育を通して、実現したいことは？
- ・ どんな人に、どこで、どのような木育をしたのか？

私の木育宣言 ~おもちゃの世界から木育に出会って~

(北海道子育て支援ワーカーズ 長谷川敦子さん)

私が「木育」に出合ったきっかけは「木のおもちゃ」、そして「木のおもちゃ」と出合ったきっかけは「初対面の子どもと仲良くなるための道具探し」でした。その中で自分自身の子育て時代には出会う機会がなかった素敵なおもちゃを見つけました。特に木のおもちゃだけに拘っている訳ではありませんが、子ども達が夢中になって遊ぶ様子を見てみると「木のおもちゃのパワーは凄いい」とつくづく思います。その理由は何でしょう。音がいい？ 重さがいい？ 触った感じがいい？ 色がいい？ 匂いがいい？ 自己主張が強くなく、遊びを発展させる余裕がある？ とたくさん思い浮かびますが、結局、理屈抜きにみんな「木が好き」なのだ気づきました。

木育は木を身近に使っていくことから出発します。「木」で遊んだ経験が子たちの心に積み重なり、多くの命と共存しながら生きていくことを実感できる大人に育っていくことを願いながら、木のおもちゃの魅力を伝えていきたいと思えます。

出典：「木育の本」(著：煙山泰子／西川栄明) から抜粋

木育の歩み(2004～2017)

◇は国および道外の動き

2004 平成16年	6月 北海道協働型政策検討システム推進事業の平成16年度テーマとして、「木育」が候補となる。「女性知事リレーフォーラムinほっかいどう」において高橋はるみ北海道知事が「木育」について発言 7月 北海道協働型政策検討システム推進事業の平成16年度テーマが「木育」に決定 9月 同推進事業の木育推進プロジェクト(リーダー:辻井達一・北海道環境財団理事長)がスタート。メンバー15人は、水産林務部や生涯学習部などの道庁職員、NPO法人理事(環境教育、子育て支援など)、公募道民(木エディナイター、文具メーカー社員、編集者など)。翌年3月まで、計8回のプロジェクト会議を開催
2005 平成17年	3月 木育推進プロジェクト「木育報告書」(木育の理念などを記載)を作成。北海道知事へ検討結果を提出 4月 木育推進プロジェクトメンバーを中心に、木育ファミリー(代表:煙山泰子)が発足 10月 木育ファミリーが「木育リビング」を札幌で開催。メンバーが木育に関連する講演などのアクティビティを実施 これ以降、道庁主催イベントなどで木育ファミリーが協働して木育普及活動を行うようになる。 年間 北海道が全道6カ所で木育ランドを開催 11,000名が来場
2006 平成18年	◇9月 「森林・林業基本計画」が閣議決定。この中の「林産物の供給及び利用の確保に関する施策」において、「市民や児童の木材に対する親しみや木の文化への理解を深めるため、多様な関係者が連携・協力しながら、材料としての木材の良さやその利用の意義を学ぶ、『木育』とも言うべき木材利用に関する教育活動を推進する。」と明記された。 9月 北海道が「木育公開講座」を開催、道庁赤れんが及び前庭ツアーを実施(赤れんがチャレンジ事業) 年間 北海道が全道6カ所で「木育ランド」を開催 10,000名が来場
2007 平成19年	◇2月 林野庁が「木材産業の体制整備及び国産材利用拡大に向けた基本方針」を公表方針の第3項目に「木材利用に関する教育活動(木育)」が設けられ、木育を促進する具体的な内容が記された。 4月 木育ファミリーが一般会員の募集を開始 4月 北見市オホーツク木のプラザに「木育広場」開設 6月 第58回全国植樹祭会場(苫小牧)にて、木育の広報活動をおこなう。「木育ランド」を開催 3,300名が来場 北海道が「学校での木育推進事業」を実施 ◇6月 林野庁が「木育推進体制整備総合委員会」を設置。(座長:山下晃功・島根大学教授、事務局:日本木材総合情報センター)メンバーは大学教授、教育関係者、工務店会長、NPO法人(環境教育など)理事、木エディナイターなど12名 ◇10月 木育活動促進助成事業の公募
2008 平成20年	◇2月 林野庁が、全国3カ所(埼玉、島根、北海道「赤レンガ木育フォーラム」[北海道との共催]で講習会開催 2月 「北の元気な森づくりシンポジウム」で木育ファミリーが木育体感広場を実施 3月 「赤レンガ木育フォーラム in 北海道」(札幌)開催 3月 木育ファミリーが「第1回 木育全国ミーティング in 北海道」(札幌)開催 3月 北海道庁が「北海道森林づくり基本計画」を策定(改訂)。新たに、第5項目「木育の推進」において「木育は、人と森林や木材の『つながり』を重視し、豊かな『人づくり』と『社会づくり』をめざす北海道発の新たな概念です」と明記され、基本理念や施策の展開などについても詳しく記された。 3月 木育事例集1作成 ◇3月 岐阜県林政部が「木育のいっぽ」を発行。同県木育推進員が発足 6月 洞爺湖サミット関連事業「環境総合展2008」における木育の発信 7月 洞爺湖サミット「北海道情報館」における木育の発信 ※海外プレス関係者へも発信 10月 『木育の本』(北海道新聞社)刊行
2009 平成21年	◇1月 「木育フォーラムin岐阜」(岐阜県立森林文化アカデミー)開催 ◇2月 埼玉、島根2カ所で木育インストラクター研修会(NPO法人活木活木森ネットワーク主催)の開催 5月 北海道が木育プログラム等検討会議を設置し、人材育成事業に着手 5月 北海道が「木育遊具等普及システム検討会議」を設置

2010
平成22年

- 1月 木育ファミリーが、むかわ町穂別(旧和泉小学校)の木育活動拠点事業に着手
- 3月 『木育達人(マイスター)入門』(北海道・木育プログラム等検討会議)刊行
- 3月 北海道が木育遊具パッケージシステム作成
 - ◇4月 NPO法人日本グッドトイ委員会(東京おもちゃ美術館)による林野庁補助事業の受託
同法人主催木育インストラクター養成講座が東京・大阪で開講
- 10月 北海道が「木育マイスター育成研修」を開始

木育マイスター1期生 38名

2011
平成23年

- 3月 『木育達人のための木育活動ガイド』を北海道、木育ファミリー、NPO法人ねおすの協働で作成
 - ◇10月 東京おもちゃ美術館内に「赤ちゃん木育ひろば」開設
新宿区でウッドスタート事業が始まる。
- 6月 「木育フェアinアリオ札幌」がイトーヨーカドーアリオ札幌と北海道との包括連携事業により実施。以降、毎年実施。
- 10月 木育マイスターによる「木育フェスタ」が七飯町大沼で開催。以降、平成24年からは東川町等でも毎年実施。
- 年間 北海道が「木育活動普及促進事業」で道内12カ所に木育指導者と資材提供

木育マイスター2期生 37名

2012
平成24年

- ◇4月 電通による林野庁補助事業の受託。神奈川県内小学校と佐川急便の社有林活用プログラム実施
- 6月 木育事例集2「木が育った森を感じること」作成
- 8月 木育ファミリーが「森と人をつなげる木育～グリーンウッドワーク」活動を開始。岐阜グリーンウッドワーク協会より講師を招き、体験会などを開催
 - ◇9月 全国の木材加工会社約30社でつくる「木育全国生産者協議会」発足
- 年間 北海道が「木育活動普及促進事業」で道内15カ所に木育指導者と資材を提供

木育マイスター3期生 39名

2013
平成25年

- 3月 北海道が北海道森林づくり基本計画(平成25～34年度)策定。木育の理念による協働の森林づくりが3つの長期目標に入り、これを解説する「北海道森林づくりガイド」を発行。
 - 木育事例集3「木育のおはなしをしてみよう」作成
 - ◇3月 ぎふ木育30年ビジョン策定(岐阜県)
- 4月 北海道が木育の理念による協働の森林づくり推進のため、全道の振興局森林室(林務課)に木育推進主査を配置
- 5月 「第1回木育マイスター全道ミーティング」が札幌市青少年の家(滝野すずらん公園)にて開催
- 8月 木育ファミリーが「第3回木育全国ミーティングin北海道」(むかわ町穂別)開催
 - むかわ町旧和泉小学校を木育活動拠点「むかわ木育の学校」と命名し木製看板を設置
- 10月 木育マイスター道南支部設立

木育マイスター4期生 19名

2014
平成26年

- ◇3月 「第1回木育サミット」が東京東京学芸大学で開催。(主催:認定NPO法人 日本グッド・トイ委員会/東京おもちゃ美術館/NPO法人東京学芸大こども未来研究所)
- ◇年間 全国で各種の木育人材育成事業が活発化。「赤ちゃん木育サポーター養成講座」「木育インストラクター養成講座」「木育指導者セミナー養成講座」など
- 3月 木育事例集4・地材地消事例集1「森が歩んだ時をもとめて」発行
- 8月 「木育絵馬プロジェクト」を実施、全国から木育宣言が寄せられる。
- 10月 「木育の10年をみつめて～木育next10」(札幌)開催
 - 木育マイスター道東支部設立
- 年間 北海道が企業や団体と連携して、東日本大震災被災地へメッセージを添えた「きぼうのプール」寄贈する「希望」を「きぼう」でプロジェクトがスタート(赤レンガ・チャレンジ事業)
 - 12月に岩手県久慈市立久喜保育園、宮城県森林インストラクター協会へ「きぼうのプール」を寄贈

木育マイスター5期生20名

2015

平成27年

- ◇1月「第2回木育サミット」新宿文化センターで開催
- 4月 改訂版「木育リーフレット」を北海道と木育ファミリーの協働で作成
- 6月 木育ファミリーの木育カフェ「私、こんな木育やっています！」で、木育プログラム体験会を実施
 - ◇9月 林野庁が「ウッドデザイン賞」を制定し、公募顕彰事業を開始。木育マスターの関係する4作品も受賞。
- 11月 木育ファミリーとグリーンウッドワーク協会が「北のグリーンウッドワーク・スキルアップ研修in むかわ」をむかわ木育の学校にて実施
- 年間「希望」を「きぼう」でプロジェクト(赤レンガ・チャレンジ事業)
- 12月にふくしま県民の森、山の家きょうどう(北海道仁木町・被災者受入施設)へ「きぼうのプール」を寄贈

木育マスター6期生23名

2016

平成28年

- ◇1月「第1回木育・森育楽会九州大会」(主催:木育・森育楽会実行委員会)が玉名郡ながす未来館で開催
- 2月「木育next10」報告書を北海道と木育ファミリーで協働発行
 - 「第1回木育・森育楽会」(新木場タワー大ホール)で道庁の木育担当者が「北海道の木育と木育マスター」を発表
 - ◇3月「第3回木育サミット」塩尻市文化会館で開催
- 3月「北海道森林づくり条例」の改正で新たに、第18条として木育の推進が加えられる。
- 5月 当麻町に木育推進拠点施設「くみなの木遊館」オープン
- 8月 木育事例集5「北海道の木育案内」発行
- 11月「第12回森のようちえん全国交流フォーラムin北海道」大沼婦人会館・林業研修センターで開催
 - ◇11月「第2回木育・森育楽会」おおさかATCビルで開催
- 年間「希望」を「きぼう」でプロジェクト(赤レンガ・チャレンジ事業)
- 12月に休暇村陸中宮古(岩手県宮古市)、いわて子どもの森(岩手県一戸町)へ「きぼうのプール」を寄贈

木育マスター7期生24名

2017

平成29年

- 1月 北海道「木育マスター」認定者が200名となる。
 - ◇2月「第4回木育サミット」東京江東公会堂ティアラこうとうで開催
 - 「木育・森育楽会東京地方大会」内田洋行ユビキタス協創広場で開催
- 3月「北海道森林づくり基本計画」(平成29～38年度)に、木育の推進が新たな基本方向として加わり施策が示される。木育事例集6「さわっていると、森にいるような気がする」発行
- 8月 木育達人(マスター)入門テキスト改訂版 電子発行
- 11月「北海道 木育フォーラム(第2回木育マスター全道ミーティング)」が川湯ふるさと館・原野のもり(弟子屈町)にて開催
- 年間「希望」を「きぼう」でプロジェクト(赤レンガ・チャレンジ事業)
- 12月に社会福祉法人大槌福祉会 大槌保育園(岩手県大槌町)、南富良野町立幾寅保育所(北海道南富良野町・H28台風被災地)へ「きぼうのプール」を寄贈
- 北海道が「木育推進事業」を拡充。「木育マスターの育成・連携」のほか、基本計画の改正に合わせて「子育て支援における木育の推進」「教育における木育の推進」など5事業を全道各地で実施
- 北海道が北海道森林管理局、公益社団法人北海道森と緑の会等と連携して、2012年から実施してきた「北海道森づくりフェスタ」を「北海道・木育(もくいく)フェスタ」に改称

木育マスター8期生24名

世界と日本の森林、北海道の森林の概要

●世界の森林

国連食糧農業機関（FAO）がまとめた「Global Forest Resources Assessments 2015」によると、平成27年の世界の森林面積は約39億9,900万haであり、この面積は世界の陸地面積の約3割に相当します。

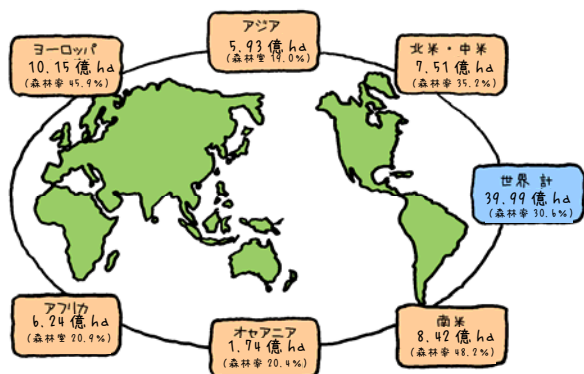


図1-① 世界の森林面積（平成27年）

世界の森林は依然として減少傾向にあります。その勢いは緩やかになりつつあります。平成2年から平成12年にかけては年平均727万haの森林が減少していましたが、平成22年から平成27年にかけては331万haと、約半分になっています。

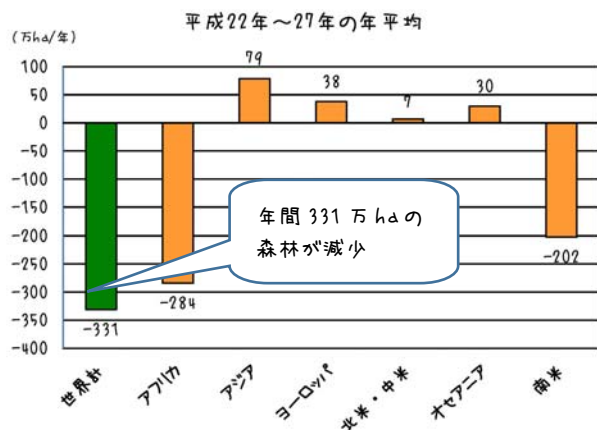


図1-② 世界の年平均森林増減面積

出典：国連食糧農業機関（FAO）（2015年）「Global Forest Resources Assessment 2015」より改変

●日本の森林

日本の森林面積は、平成24年のデータによると2,508万haで国土面積の66%を占めており、世界的にみても森林率が高い国として位置付けられています。

林業活動を通じて造成された人工林の面積は、国土面積に占める割合が昭和41（1966）年には38%でしたが、現在1,029万haで41%を占めています。森林蓄積^{*}では、当時の約5.4倍となっています。

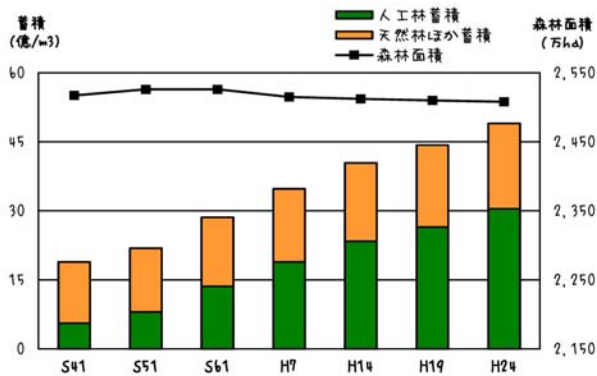


図1-③ 全国の森林面積と森林蓄積の推移

出典：「平成28年度北海道森林づくり白書」（北海道）から改変

森林の整備状況について見ると、戦後の大きな木材需要に対応するため、人工造林面積は、昭和40年代前半には30万haを超えていましたが、林業の採算性の低迷に伴い減少を続け、昭和61年には10万haを割り、近年はおおむね2~3万haで推移しており、平成26年度には24,753haとなっています。

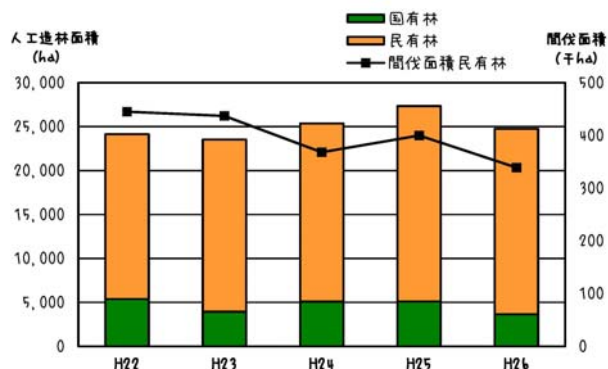


図1-④ 全国の人工造林面積と間伐面積（私有林）の推移

出典：「平成28年度北海道森林づくり白書」（北海道）から改変

●北海道の森林

本道の森林面積は、平成28年4月1日現在で554万ha、北海道の土地面積（北方領土を除く）の71%を占めています。この面積は、全国の森林面積の約4分の1に相当する広さであるとともに、道民1人当たりでは約1.0haと全国平均の約5倍となっています。

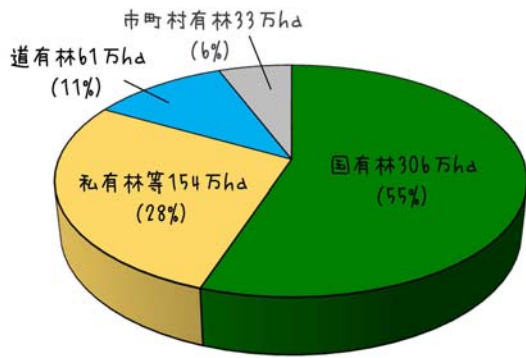


図 1-5 北海道の所管別森林面積

出典：「平成 28 年度北海道林業統計」（北海道）から作図

林種別では、天然林が 68%と最も多く、次いで人工林 27%、無立木地・その他 5%となっており、天然林が多く人工林が少ないことも特徴として上げられます。

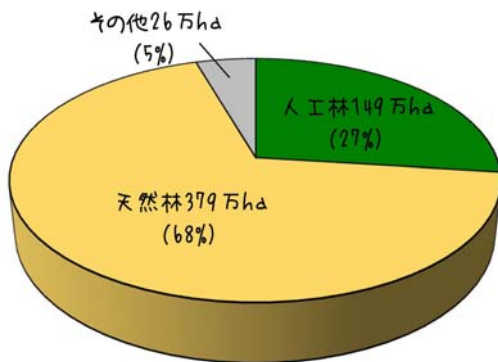


図 1-6 北海道の林種別森林面積

出典：「平成 28 年度北海道林業統計」（北海道）から作図

また、森林蓄積[※]は、平成 28 年 4 月 1 日現在で 7.9 億 m³となっており、全国の 16%を占めています。林種別では、天然林が人工林を上回っていますが、近年の動向を見ると、人工林の蓄積の増加が顕著に見られます。

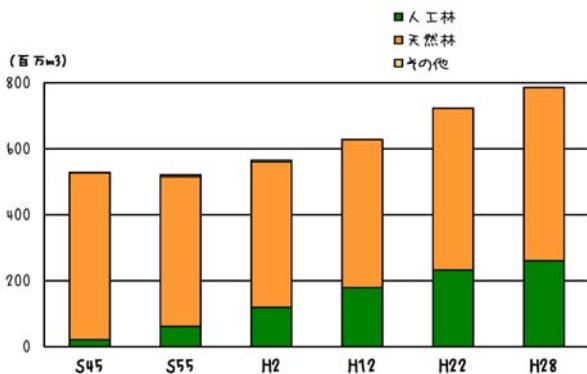


図 1-7 北海道の森林蓄積の推移

出典：北海道水産林務部「北海道林業統計」より

森林整備の状況は、北海道では戦後、人工造林が積極的に進められ、昭和 44 年度に年間 7 万 2 千 ha に達しましたがその後は減少を続け、近年はカラマツ等の人工林が伐採・再造林期を迎えていることから緩やかな増加傾向に転じ、平成 27 年度には 7,487ha となっています。

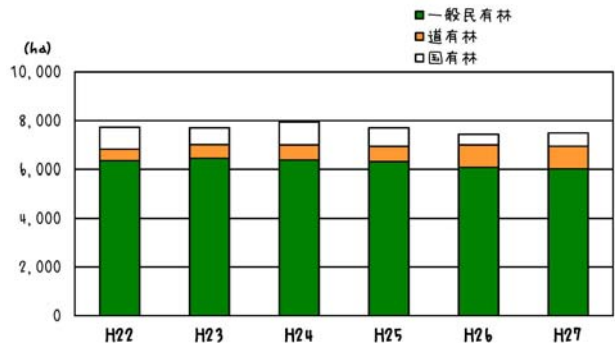


図 1-8 北海道の人工造林面積の推移

出典：「平成 28 年度北海道森林づくり白書」（北海道）から改変

また、間伐は、間伐対象となる樹齢 11~45 年生の人工林面積の増加に伴い、統計を取り始めた昭和 56 年度の 3 万 1 千 ha から、平成元年度には 5 万 6 千 ha に達しました。その後は森林所有者の経営意欲の減退などから減少を続け、平成 17 年度には約 4 万 ha まで減少し、近年は年間 5 万 ha 前後で推移し、平成 27 年度には約 4 万 8 千 ha となっています。

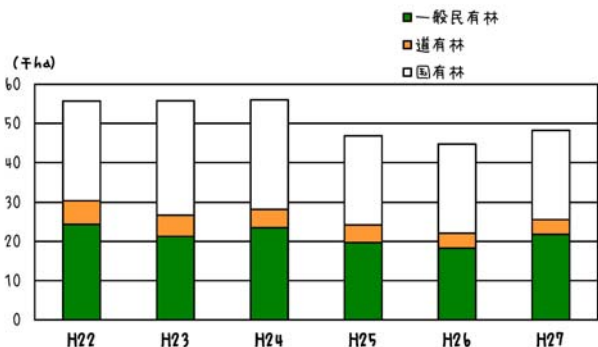


図 1-9 北海道の間伐面積の推移

出典：「平成 28 年度北海道森林づくり白書」（北海道）から改変

森林は、木材生産だけではなく、水源のかん養、土砂流出の防止などさまざまな公益的機能を有しており、北海道の森林を評価額に換算すると 11 兆 1 千億円 (平成 16 年度の試算) となります。

※ 森林蓄積とは？

その森林にある木の量のこと。単位は立方メートル。

◆木育って、何？ ～理念を読んでも、木育のことが今ひとつよくわからないというあなたへ～

「なんか、ミシミシしてんのがいいんだ」「学校の中に入っても、自然がいっぱいな感じがして気持ちいい」

築 70 年以上経つ木造校舎の小学校で学ぶ子どもたち。てかてかになった階段の手すりをいとおしそうにさすりながら話してくれた。

「山の匂いがする。山育ちだからわかるんだ。やっぱり気分が落ち着くね」

老人ホームの利用者たちが、地元のボランティアたちに車椅子を押してもらいながら近くの森へ出かけた。日ごろは引きこもりがちなお年寄りも、森へ行けば表情がぱっと明るくなる。

「大学に入るまで、どんな木でも、伐るのは悪いことだと思ってた」

林学の授業で間伐の意味を知ったという農学部の学生。小さいころから木が好きだったけど、森のことはよく知らなかったと気づいたそうだ。

立場で微妙に異なる木育の捉え方

「木育」という言葉をいつからご存じでしたか。木育は、2004 年に北海道と道民による「木育推進プロジェクトチーム」で検討された新しく生まれた言葉。プロジェクト報告書には木育の理念がまとめられた。

「子どもをはじめとするすべての人が『木とふれあい、木に学び、木と生きる』取り組み。それは、子どものころから木を身近に使っていくことを通じて、人と木や森との関わりを主体的に考えられる豊かな心を育むことです」

この考えは大切だと思うし、共感も覚える。ただ、かなり大きな概念で、木育に携わる人たちの間でも立場によって微妙に捉え方は異なる。

私も以前から木育には興味があったのだが、中身をよく理解していたとはいえない。子どもが木の遊具で遊ぶ写真を木育イベントの案内でよく見かけても、それは木育のほんの一面にすぎないだろうと感じていた。06 年に国がまとめた森林・林業計画では、木育は「木材利用に関する教育活動」と位置づけられた。木材利用に絞られていくことに少し違和感を抱いた。

木育は「つながり」のキーワード

そんな折、木工デザイナーで木育ファミリー代表の煙山泰子さんと『木育の本』を刊行する機会を得た。執筆を機に、「木育とは何か」というもやもや感を払拭したいと思った。そして、全国各地の様々な木育事例と思われるところを取材すると、そのほとんどは、木育という言葉が生まれるずっと以前から行われている活動だった。「あっ、言われてみれば、これも木育ですね」との反応を示す実践者もいた。

例えば、ドイツなどで盛んで最近は日本でも広まっている、自然を利用した教育活動の試み「森のようちえん」。校有林の木を伐り出して中学入学時に自分の机と椅子を作らせる学校。高校生が枝打ち職人や木地師などの「森の名人」から話を聞いて文章にまとめる「森の聞き書き甲子園」等々。冒頭の3つのシーンは、木育の取材中に見聞きしたものだ。

取材を通して意を強くしたのが、木育には「つながり」が大事だということだ。森に入り樹木に接して感じる自然の素晴らしさや豊かさ。一方、日常生活で接する木材や木工品から得る、利便性や心地よさ。自然としての樹木、生産財としての木材はつながっており、昔から人間はそれを知った上で、森を保ちながら材を得る親密な関係を築いてきた。その関わりの中で、人間も自然の一部であり多くの生命と共存していることを実感する。これが木育の取り組みのベースにあるのだと。

肩ひじ張らずに日々の暮らしから

木育の中でも私が重視したいのは、森や木の役割や現実を正しく知り伝えていくことだ。農学部学生が思っていたように、木を伐るのはすべて悪いとは限らない。でも、そのあたりが誤解されていることもある。思い込みや間違った情報を基に、環境問題が語られていることもある。

例えば、今話題の CO₂ 削減問題。森林は炭素を蓄える役割が期待されるが、木が伐られてもそれが製品になって何百年も使われれば、その間は炭素を蓄え続ける。こうした点は案外知られていない。最近、「環境にやさしい」との理由で樹脂製の箸を使う外食チェーン店などが増えている。でも、石油が原料の箸よりも、国産間伐材で作る割り箸の方が環境にやさしいと思うのだが。

木育を冠した木工教室があれば、森を歩くイベントもあるが、そうした単体の活動だけでは十分ではなく、森、木、人のつながりや文化的背景など、川上から川下までの大きな流れを視野に入れた取り組みこそが、木育には必要だろう。

でもまあ、まずは肩ひじ張らずに、森を歩いて木を愛で、みそ汁は木のお椀によそい、木の椅子に座って本を読む。そんな日々の暮らしを過ごすことが、木育のきっかけだと思っている。

(文・西川栄明 ノンフィクションライター、
木育プログラム等検討会議委員)

※ このコラムは、2009 年 12 月 10 日付け朝日新聞北海道版「北の文化」欄に掲載された「育て！ 木育(上)」の原稿を加筆修正したものです。